

## 国語辞典に「古風」と注記される語の使用実態調査

## —『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて—

柏野 和佳子<sup>1</sup> 奥村 学<sup>2</sup><sup>1</sup> 国立国語研究所・東京工業大学 大学院総合理工学研究科 <sup>2</sup> 東京工業大学 精密工学研究所

## 1. はじめに

現代語の辞書記述では、「古い」語の見出しとしての採否や用法記述が問題になる。現代語の辞書で取り上げるべき「古い」語とは何か。現代でも使う「古い」語もあるのではないか。また、現代語で使われる「古い語」は、用法にどのような特徴があるものであるのか。

現代語の辞書で「古い」語をどう扱うべきかを明らかにするために、岩波国語辞典<sup>1</sup>で「古風」と注記される語を対象に、その使用実態を『現代日本語書き言葉均衡コーパス(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese; 以下BCCWJと記す)』に収録されている約3,000万語分の「書籍」テキストを用いて調査した。

その結果、柏野・奥村(2010)では、「古風」な語の使用は「主に古典の引用で使用されるもの」「主に時代小説や歴史小説で使用されるもの」「古風であるが主に現代語として使用されているもの」の3つに分けられることを明らかにした。

本稿では、現代語としての用法には「現代語であるが古い文体の中で使用されるもの」もあることを指摘し、「古風」と注記される語のうち頻度上位10語を対象に用例を4分類して分析した結果について報告する。

## 2. 調査

## 2.1 調査候補語の選定

いわゆる「古い」語は、国語辞典に「古風」「古語(的)」「雅語(的)」「文語(的)」といった注記がされている。これらのうち、古さがあるということだけを表す指標と思われる「古風」「古語(的)」にまずは着目した。残りの「雅語(的)」には風雅な趣があることや、和歌などに用いられる語という側面があり、「文語(的)」には文章だけに用いられる語という側面があるため、今後の別調査の候補とすることとした。また、「古語(的)」は柏野・奥村(2010)で報告したとおり、岩波国語辞典には16語しかなかったため、本稿では「古風」のみ取り上げる。なお、「古風」と注記される語は岩波国語辞典には151

語あった。

注記は、たとえば次に示すように、下位区分された特定の語義にだけ付されるものもあれば、語に付されるものもある(以降、引用中の太字表示は本稿著者による)。また、実際は、「古風」「既に古風」「やや古風」や、「古風な言い方」といったように注記の仕方に細かな違いが見られるが、「古風」を含むものをすべてひとくくりにして調査候補語とした。

## ・いでたち【出(で)立(ち)】

①(外出する時の)身なり。装い。「たいそうな一だ」

②旅立ち。しゅったつ。▽古風。

## ・あいやく【相役】

同じ役(にについている者)。▽既に古風。

## ・ころおい【頃おい】

その折。「晩秋の一」。ころあい。「一を見て訪ねる」▽やや古風。

## ・かまえて【構えて】

《副詞的に》①待ちうけて。用意して。心にかけて。

②決して。「一油断するな」▽古風な言い方。

## 2.2 調査対象語の選定

調査候補語すべてについて、最新版の第七版の収録の有無を確認したところ、「古風」と注記のあった「かえり【回り】」「じする【治する】」「みやばら【宮腹】」の3語は、未収録語となっていた。これらは改版の機会に現代語ではないとの判断がなされた語であると考え、今回の調査対象語からは外した。

また、全文検索システム『ひまわり』(<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/>)を用いて調査候補語の使用例を検索する際に、調査対象としたい用例判別が他と紛れて困難であった次の23語は今回は対象外とした。

いっそ、う、うつ【打つ】、くにびと【国人】、さと【里】、じきげ【直下】、しも【下】、じゃ(ぢや)、しよせい【書生】、ぜんぶ【全部】、そち【其方】、それ【其(れ)】、たいじん【大人】、たいぜい【大勢】、つ【唾】、つかさ【司・官】、であう【出合う・出会う】、とうじ【当時】、とも、の、むやく【無益】、やうち【家内】、やくだい【薬代】

<sup>1</sup> 本研究では、CD-ROM 岩波 日本語表現辞典——国語・漢字・類語』収録の『岩波国語辞典第六版』(2002年)を使用した。なお紙版の最新版は第七版(2009年)である。

つまり、調査対象語として 125 語を選定した。

### 2.3 調査対象のコーパス

国立国語研究所では、書籍や雑誌、新聞、白書、教科書、ブログなどをあわせ、全体で 1 億語の収録を目標にした BCCWJ の構築が進められている。構築期間は 2006～2010 年度であり、サンプリング・電子化・著作権処理・形態論情報付与などの作業が順次進められ、現在最終段階を迎えている。なお、2009 年 8 月より一部に限定的に公開されている「BCCWJ 領域内公開データ 2009」には、複数のサブコーパスが収録され、全体では、8,200 万語のデータが収録されている。

本調査では、そのうちの「流通実態(図書館)サブコーパス」<sup>2</sup>を用いた。すでに達成目標の分量である約 3,000 万語の「書籍」のテキストデータが収録されている。現時点で利用可能な、もっともまとまった書籍データであるため、このサブコーパスを利用した。

### 3. 使用頻度調査の結果

調査対象語 125 語<sup>3</sup>について、「BCCWJ 領域内公開データ 2009」の「流通実態(図書館)サブコーパス」より、全文検索システム『ひまわり』を用いて使用頻度を求めた結果を示す。

#### 3.1 使用頻度 0 の語

使用頻度が 0 だったものは、表 1 に示す 48 語であった(下位区分された特定の語義にだけ注記がある見出し語をグレーで表示する。以降、同様。)

今回の調査範囲において、たまたま使用されていないかっただけのものもあると思われるため、使用頻度 0 というのもって、ただちに現代語としての用法がなしであるとは言えないが、これらは現代語としての使用傾向が見られにくいものであると言えるだろう。

#### 3.2 使用頻度 1 以上の語

次に、使用頻度 1 以上であった語とその頻度を表 2 に示す。使用頻度が多かった上位 10 語は、その頻度

<sup>2</sup> 1986 年から 2005 年までの 20 年間に発行された書籍のうち、東京都内の 13 自治体以上の公共図書館で共通に所蔵されていた書籍が母集団とされ、そこから抽出したサンプルから成るサブコーパスである。

<sup>3</sup> 念のため第七版の未収録を理由に調査対象外とした 3 語についても使用頻度を調査したところ、「かえり【回り】」(回数・度数を表す、古風な助数詞。回かい。たび。のみ、「蕎麦の三かえり」(藤村和夫、1930 年代生まれ、『蕎麦屋のしきたり』日本放送出版協会、2001 年)という用例があった。ほかは、使用頻度 0 であった。

に色づけをして示す。

表 1 使用頻度 0 の「古風」と注記のある語

あつかい	【扱い】	だいいふ	【乃父】
あつかう	【扱う】	たまざん	【玉算・珠算】
あとげつ	【後月】	ておもい	【手重い】
いきせき		てんうん	【天運】
おおみよ	【大御代】	どうりゆう	【同流】
おもんみる	【惟る】	とと	【父】
かいしき		なぐさむ	【慰む】
かくし	【隠し】	なにがさて	【何がさて】
かしこきあたり	【畏き辺り】	なにがな	【何がな】
がな		なにさま	【何様】
からめる	【揃める・絡める】	にえぎも	【煮え肝】
かんぼつ	【簡抜】	によしょう	【女性】
けいさい	【継妻】	ばうて	【場打て】
けっこう	【結構】	ははじゃびと	【母者人】
けんご	【堅固】	ひきあけ	【引(き)明け】
ごのう	【御惱】	ひきずり	【引(き)摺り】
こわつき	【声つき】	ひろいあるき	【拾い歩き】
じっしょう	【実正】	ひろう	【拾う】
しまつ	【始末】	ぶじ	【無事】
しろつばい	【白つばい】	まいる	【参る】
しんがく	【進学】	ままい	【継しい】
すずどい		よがら	【世柄】
せっかく	【折角】	ろうせい	【老生】
せんど	【先度】	ろうだい	【老台】

表 2 使用頻度 1 以上の「古風」と注記のある語と頻度

あいやく	【相役】	1	しんずる	【進ずる】	15
あんずるに	【案ずるに・按ずる】	11	ずんと		4
			せわ	【世話】	14
いかい		4	そなた	【其方】	434
いかさま	【如何様】	8	だいいない	【大事無い】	6
いかん		446	だんこん	【男根】	41
いずれ	【何れ・孰れ】	5	つくもがみ	【九十九髪・江浦草髪】	3
いっこう	【一向】	1			
いでたち	【出(で)立(ち)】	77	つけびと	【付け人】	2
			つけぶみ	【付け文】	5
いと		72	つむ	【摘む】	2
いな	【異な】	7			18
うせる	【失せる】	214	どうぞ		2
うちつけ		1	どうやく	【同役】	13
おなじくは	【同じくは】	2	とのご	【殿御】	7
かしこくも	【畏くも】	5	ないふく	【内福】	3
かまえて	【構えて】	1	なと		1
きこえる	【聞(こ)える】	1	ならぬ		5
ぎじょう	【議定】	7	なんだ		21
くちおしい	【口惜しい】	36	にょにん	【女人】	171
ぐんばい	【軍配】	1	にんじょう	【刃傷】	40
げせる	【解せる】	37	のう	(なう)	11
けそう	【懸想】	8	はたまた	【将又】	65
けつく	【結句】	3		【等しい・均しい】	1
こうじき	【高直】	1	ひとしい		
こくぼ	【国母】	3	ふうぎ	【風儀】	8
ござなく	【御座無く】	3	ほうばい	【朋輩・傍輩】	33
ごじん	【御仁】	41	ほど	【程】	4
こなた	【此方】	5	ほんに	【本に】	46
これ	【此(れ)】	2	まかりならぬ	【罷り成らぬ】	11
ころおい	【頃おい】	2	みんりよく	【民力】	19
さ		26	むさい		3
ざ		3	ものども	【者共】	104
さしまねく	【差(し)招く・磨く】	3	やくぎ	【役儀】	8
			ゆうけい	【夕景】	15
さり		8	ゆめさら	【夢更】	1
じする	【辞する】	162	よしない	【由無い】	2
しだら		33	よしなに	【良しなに】	7
しゅつとう	【出頭】	1	よち	【輿地】	8
しゅんじょう	【春情】	3	よのぎ	【余の儀】	1
しよげん	【諸彦】	1	わい		159

## 4.用法の分類

現代語としての古い語を分析するためには、得られた用例が「現代語」の用例であるのか、そうではなく「非現代語」の用例であるのかを区別する必要がある。「流通実態(図書館)サブコーパス」より得られる用例は、大きく次の4つに分類することができる。

- (1) 古典の引用で使用されるもの【古典の非現代語】
- (2) 時代小説や歴史小説で使用されるもの【享受と創造の非現代語】
- (3) 現代語であるが古い文体の中で使用されるもの【古い文体の現代語】
- (4) 古風であるが現代語として使用されているもの【現代語】

たとえば、「ものども【者共】」には、各分類に該当する次のような用例がある(太字, 下線は本稿著者による)。

・『丹州三家物語』のいう「降参の者共は念比に扶助して皆家臣となる」状態であつたらう。

(吉村豊雄, 1940年代生まれ, オメガ社|編『地方別日本の名族』新人物往来社, 1989年) →「**古典の引用**」(1) (※下線が古典の引用部分。)

・「御前が鎌倉を不在にすれば、必ずや関東、東北、北陸の叛意を含む者どもが鎌倉をうかがうでしょう」(森村誠一, 1930年代生まれ, 『太平記 上』角川書店, 2002年) →「**時代小説や歴史小説**」(2) (※下線部分, つまり, テキスト全体が時代小説の本文。この例は鎌倉時代末期から南北朝時代の時代設定。)

・王は旅行で疲れてゐたから、早く床に就き、寝殿には二人の侍従が(当時の習慣に依つて)すぐ側に眠りました。彼はマクベスの歓待を非常に悦び、寝所に退くまへに金を役役の**者ども**に贈りました。(野上弥生子訳, 1880年代生まれ, 『野上弥生子全集』第2期第20巻, 岩波書店, 1987年) →「**古い文体**」(3) (※下線箇所はいずれも旧仮名遣い。テキスト全体が旧仮名遣いである。)

・雲になつてしまったあわれな**者ども**は、ゆく先がわからなくて、さまよいつづけた手紙たちです。あて名がちがったり、町名を書かなかつたり、届きようのない手紙たちの、なれの果てですよ。(福永令三, 1920年代生まれ, 『クレヨン王国新十二か月の旅』講談社, 1988年) →「**現代語**」(4)

以下, 4分類の詳細を述べる。

### 4.1 古典の非現代語

BCCWJの収録テキストには、実は「非現代語」(BCCWJでは、明治元年より前に書かれた日本語と定義)が若干混入している<sup>4</sup>。まとまった「非現代語」は収録テキスト対象外要素として収録しないのだが、一文単位でのテキストの完全収録を保証するために、インライン中に引用されているような「非現代語」は排除せず、そのまま収録している。よって、このような事情から本調査では古典の引用箇所から用例が得られている場合がある。本稿ではこのタイプのことを「古典の非現代語」と呼ぶこととする。

### 4.2 享受と創造の非現代語

いわゆる「時代小説」「歴史小説」などと呼ばれる、江戸時代以前を舞台とする文芸作品(国内, 国外を問わず)のテキストにも「非現代語」が現れる。石井(1986)は、たとえば「おぬし、・・・でござるか」などは、「歴史小説なり時代小説なりに現はれるからと言って、その小説の扱ふ時代の古代語と考へるのは、早計である。非現代語すなはち古代的言語を用いた作品においては、作家が古代的言語を創造し、読者がそれを享受する、といふ図式が想定できる。」と述べ、そういった享受と創造による「非現代語」が『源氏物語若紫』現代語訳や、日本文芸家協会『歴史ロマン傑作選』の会話文に多く現れることを調査分析し、報告している。BCCWJには「時代小説」「歴史小説」などのテキストが多数収録されており、本調査では、石井(1986)の言う享受と創造による「非現代語」に該当する用例が多く得られている。本稿では石井(1986)を参考に、このタイプのものを「享受と創造の非現代語」と呼ぶこととする。

### 4.3 古い文体の現代語

明治以降に執筆され、文芸作品の場合はその時代設定も明治以降である場合でも、たとえば、旧仮名遣いを用いるなど、全体的に古い文体のテキストがある。このようなタイプから得られる用例を「現代語」とは区別し、「古い文体の現代語」と呼ぶこととする。

### 4.4 現代語

執筆時期、執筆対象が明治以降であり、文芸作品の場合はその時代設定も明治以降であり、その文脈が現代語として何ら違和感を感じないテキストから得られる用例を「現代語」と呼ぶこととする。

<sup>4</sup> BCCWJに収録するテキストの抽出基準についての詳細は、柏野ほか(2009)を参照。

「現代語」の用例と判断した例は、たとえば次のようなものである。

- ・ここで泣いてはいかん、と咽喉の塊を懸命にのみ下しながら、(宮尾登美子, 1920年代生まれ, 『朱夏』新潮社, 1998年)
- ・不審な気持ちが消え失せて、とにかく言葉が交わしたかった。(浅倉卓弥, 1960年代生まれ, 『雪の夜話』中央公論新社, 2005年)
- ・コミック誌から飛び出してきたようないでたちの男だ。(佐々木譲, 1950年代生まれ, 『新宿のありふれた夜』角川書店, 1997年)
- ・セブン-イレブンの店にほしいものがなければ、いとも単に、買いにこなくなります。(鈴木敏文述, 緒方知行編, 『商売の創造』講談社, 2003年)
- ・恋なのか、忠義なのか、はたまた親子の恩愛なのか。(古井戸秀夫, 1950年代生まれ, 『歌舞伎』新潮社, 1992年)

#### 4.5 用例の分類結果

4分類のうち、「古典の非現代語」は、たまたまその用例が得られる場合がある、といった程度となるため、用例数は少ない。また、「古い文体の現代語」も、それに該当するテキストそのものが少ないため、用例数は少ない。

一方、「享受と創造の非現代語」については、「時代小説」や「歴史小説」のテキストがBCCWJに多く収録されていることから用例数は多くなる。また、「古風」の注記が付くものの、「現代語」としての用例が多く得られる語も少なくはなかった。そして、どちらのタイプの用例が多いかというのは、語によって分かれる傾向が見られた。

「古風」と注記の付された語のうち、特に使用頻度が多かった10語についての用例の分類結果を表3に示す。上から6語は「享受と創造の非現代語」の用例の割合が多い順、次の3語は「現代語」としての用例の割合が多い順である。そして、最後の1語が両者の用例の割合が拮抗していた語である。

表3 「古風」使用頻度上位10語の用例分類結果

見出し	古典		享受と創造		古い文体		現代語		計
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	
いかん	1	0.2	59	13.2	0	0.0	386	86.5	446
うせる	5	2.3	29	13.6	4	1.9	182	85.0	214
いでたち	0	0.0	13	16.9	0	0.0	64	83.1	77
いと	1	1.4	14	19.4	0	0.0	57	79.2	72
はたまた	0	0.0	10	15.4	5	7.7	50	76.9	65
じする	2	1.2	27	16.7	17	10.5	116	71.6	162
そなた	0	0.0	418	96.3	8	1.8	8	1.8	434
ものども	8	7.7	85	81.7	4	3.8	7	6.7	104
によにん	16	9.4	102	59.6	9	5.3	44	25.7	171
わい	0	0.0	71	44.7	3	1.9	85	53.5	159

#### 5. おわりに

岩波国語辞典に「古風」という注記がついている125語に関し、使用実態を調査した。使用頻度が0であったものが48語あった。また、たまたま用例が得られても古典の引用使用であるものもあった。それらは、「現代にあまり使用されていないもの」と位置づけて辞書記述すべき一群であるだろう。

一方、主に時代小説や歴史小説で使用される、「享受と創造の非現代語」と呼ぶことのできる一群があり、現代においてそれら小説を読む際の理解に欠かせないものである。「現代語」ではないと排除することなく、それらも現代語の辞書の対象語として十分に考慮すべきものである。

さらに、古い文体をとるために古風な語として使用されている場合もあれば、古い文体を意識することなく、もしかしたら古風という意識すらなく使用されている場合もあるということがわかった。いずれの場合も現代語の辞書記述としてその用例や用法を詳細に記述すべき必要が高いと言える。

つまり、本調査によって、「古い」とされる語を現代語に位置づけて記述する重要性と、たとえば「古風」とひとくくりにはせず、使用傾向に即した用例、用法の詳細記述の有用性を明らかにした。

【謝辞】 調査補助をしてくださった田嶋明日香さんと、立花幸子さんに感謝します。本研究は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築:21世紀の日本語研究の基盤整備」(平成18~22年度、領域代表者:前川喜久雄)による補助、並びに、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「辞書用例の記述仕様標準化のための実証研究」(課題番号:20520428)の助成を得ています。

#### 【参考文献】

- 石井久雄(1986)『古代的言語の享受と創造』(文部省昭和60年度科学研究費補助金による一般研究(C)研究報告書)。
- 柏野和佳子・稲益佐知子・田中弥生・秋元祐哉(2009)「第4章 対象外要素の排除指定」、『特定領域研究「日本語コーパス」平成20年度研究成果報告書『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における収録テキストの抽出手順と事例』, pp. 66-88.
- 柏野和佳子・奥村学(2010)「国語辞典に「古い」と注記される語の現代書き言葉における使用傾向の調査」『情報処理学会 人文科学とコンピュータ研究会報告』88, pp. 59-70.